

## 小学校における地域文集の研究 — 弘前市国語教育研究会編「ひろさき」の児童詩を中心に—

小山内 早苗 弘前市立北小学校

### 要旨

本研究は、弘前市国語教育研究会編の文集「ひろさき」(以下「ひろさき」と省略する)がどのような児童詩を選考してきたかを作品と評を基に考察し、内容と表現の変遷を探ったものである。昭和35年度に創刊号を発行した「ひろさき」は、今年で第47号を発行するまで、毎年継続して地域の児童の作品を伝えて来た。昭和40年から50年代には、出稼ぎや生活苦、家族の肖像が赤裸々の状態で多数表わされていたのに対し、昨今は困窮の中の実感という点から次第に遊離した内容が増え、変化が見られるようになった。調査の結果、作品の変遷は、社会や価値観、選者の眼の違いにあった。また、郷土に目を向けた作品はどの時代も大切にされてきたことが作品や評から判明した。作文と違って系統立てた指導が困難で、その上よしとされる作品も選者によって異なることから、「ひろさき」の児童詩の特徴を一括りに纏めるのは難しいことが分かった。本研究は2人の選者に焦点を当て、選出された作品と評、選者の詩教育観を基に、「ひろさき」児童詩の不易と流行の実際を探った。

【キーワード】 児童詩 内容と表現の変遷 選者の眼 不易と流行 発見的認識

### 1 はじめに

#### 1-1 研究の目的

「ひろさき」には、約45年間継続して地域の児童詩が掲載されている。地域の歴史を刻むとも言われた「ひろさき」には毎年弘前市の全小学校から作品が寄せられ、その中から学年毎に入選した作品が掲載されて全学級に伝えられてきた。作品は「作者と生活」「認識と表現」という観点で選出されることが多く、同時代でも選者の眼により選出作品の傾向は異なっていた。選者としての双璧である泉谷明と片岡通夫の眼から、掲載されている詩の内容(題材)や表現の傾向と、そこで選者が何を認め何を提案してきたかを探り、「ひろさき」の児童詩の歴史とこれからの方向性を研究することで、「ひろさき」における児童詩の不易と流行を考察することができるのではないかと考えた。不易の部分に関しては、時代が変わっても守り続けていかなければならない財産として引き継ぎ、詩教育の実際に活かしていく必要を感じている。嘗て教育出版の教科書にも数編作品が採り上げられたように、地域文集の作品でありながら全国区での評価も高いため、その魅力に迫り過去の作品像を明らかにすることは、過去の実践を振り返り、これからの詩教育がどのように成されるべきかを考える指針になると考える。流行の部分には、時代が要請したもの、選者が願ったものというように、内容と表現の両側面からその実際を解き明かしていくことで、「ひろさき」の特色を探り出し纏めていきたいと考えた。以上のことから本研究の目的を設定する。

#### 1-2 研究の動向

これまで「ひろさき」を分析的に考察した論文は皆無であった(作文のみ考察<sup>註1)</sup>)。作文と違って系統性も明確に定められてこなかったため、児童詩の研究は難しいとされてきた。日本作文の会等においても、系統表等を作って詩教育を計画的に行ったという実践記録はあまり見当たらない。地域文集の研究としては、兵庫県においてのもの(地域文集「あじさい」の考察等)が少数見られることに留まっている。詩教育充実のため、地域文集の歴史を繙き、その内容と表現の傾向を分析考察し、実践指導に活かしていく価値は高いと考える。

## 2 研究の方法

### 2-1 研究の実際

これまで十数名が児童詩の選考に関わってきたが、選考制が確立した 10 号代から 20 号代に最も影響力の大きかった 2 人の選者(⑦と⑧)についての比較考察から選者の眼を明らかにした。代表的な作品と評、また詩について述べている著書等から研究考察を行った。

- |             |                |                                      |
|-------------|----------------|--------------------------------------|
| ① 第 3 号     | 藤井 幹夫          | * ⑩⑪を除いて、選者はすべて弘前市国語教育研究会所属の現役の小学校教師 |
| ② 第 4～5 号   | 千葉 壽夫          |                                      |
| ③ 第 6 号     | 藤井 幹夫と千葉壽夫     |                                      |
| ④ 第 7～9 号   | 藤井 幹夫          | 粗選に初めて女性教師が携わった時代                    |
| ⑤ 第 10～12 号 | 千葉 壽夫          |                                      |
| ⑥ 第 13 号    | 藤井 幹夫          |                                      |
| ⑦ 第 14～22 号 | 泉谷 明           | 詩人 日本現代詩人会                           |
| ⑧ 第 23～25 号 | 片岡 通夫          | 日本作文の会参加 「北原白秋賞」受賞                   |
| ⑨ 第 26 号    | 川村 千枝子         |                                      |
| ⑩ 第 27～33 号 | 林 尚男(弘前大学助教授)  |                                      |
| ⑪ 第 34～38 号 | 佐藤 きむ(弘前大学助教授) |                                      |
| ⑫ 第 39～44 号 | 工藤 浩司          | 詩人 「亜土」同人                            |
| ⑬ 第 45～46 号 | 小山 壽美子         | * 現在編集中⑭ 第 47 号 小山内 優子               |

### 2-2 泉谷 明(⑦第14号～22号)の実際

「ひろさき」第 14 号から第 22 号までの選者をつとめた。選考を 9 年間という長い間行ったということでは、数少ない選者の 1 人である。視線はあたたかいもの、ウィットに富んでいるもの、ユーモアのセンスが感じられるものというように、独自のものであった。生活綴り方を継承してきたそれまでの選者や、次の選者である片岡通夫とは一線を画している。実際に泉谷明の作品評は次のような文言が多く用いられていた。(左 表 1 参照)

<ul style="list-style-type: none"> <li>○ あたたかい</li> <li>○ ユーモラス</li> <li>○ リズム感</li> <li>○ ～が妙</li> <li>○ ～が生きている</li> <li>○ ほのぼの</li> <li>○ ほほえましい</li> <li>○ 手際よい</li> <li>○ おかしくもせつない</li> <li>○ 構成もがっちり</li> <li>○ ～が悲しくひびく</li> <li>○ 動きのある文体</li> <li>○ 心の動きが説明抜きによく分かる楽しい作品</li> <li>△ 最終行は、とってつけたような蛇足</li> <li>△ 説明が長く長文になっている</li> <li>△ 散文になってしまった感じ 表 1</li> </ul>	<div style="text-align: right;">             しゅみがちがう 西 三年 木村 ひとみ              「姉ちゃん、あれ、いいよ。」              とピンクのかばんをゆびさすと、              姉ちゃんは              「いやっ。」              といっ              べつのウインドウを見た。              「姉ちゃん、このかばんいいよ。」              とまた、いったら、              姉ちゃんは              「しゅみがちがうんだな。」              といばっていった。              しゅみがちがうって              なんのことかわからないが、              わたしが、すきなのは              姉ちゃんが、きらいということらしい。              「ひろさき」第二十一号 P53 A           </div>
--	---

挙げた A・B の詩は、どちらもポイントが絞られている比較的短い作品である。氏が選者を務めていた時期は、このように短く纏まっているものが、現在選出されている詩と比べると多く選出されていた。特に A の詩に関して考察するならば、上記の「あたたかい」「ユーモラス」「リズム感」「ほのぼの」「ほほえましい」「心の動きが説明抜きに分かる楽しい作品」という部分が挙げられる。姉妹の会話の妙が読者を引きつける。

氏の詩に対する考え方は、「ひろさき」第 21 号の総評から伺い知ることができる。ここで大切なのが、「よい作品には、常に驚きにつながる発見がある」ということである。作品 A は、姉と自分は「しゅみがちがう」という驚きと発見を、

作品 B は弟と先生の普段はあまり見ることのない様子に驚き、それを表現している。

おとうと  
松原 三年 齋藤 久美子  
学校で  
おとうとの信<sup>のぶたか</sup>貴が泣いていた  
うけもちのせんせい、  
「わかったかな。」  
と顔を真っ赤にしてどなっていた。  
信貴は、両手のこぶしで目をこすって、  
下の方で泣いていた。  
わたしは、  
かいだんのとちゅうから、  
じっと見ていた。  
「ひろさき」第二十一号 P197 B

私は、子どもの詩、大人の詩と頭になく今まで読んできた。それで、子どもの詩として決定的に違うところは、よい作品には、常に驚きにつながる発見があるということである。

先入観がないから見たとおりを書く、言葉が極端に足りないので、精いっぱい、自分が持っているものだけで表現する。低学年ほど面白い作品が多いということは、ここにあるような気がする。(中略)

三年生の「しゅみがちがう」「おとうと」のように、事実を感情をまじえないで自分の持っている言葉で書くことも感動させてくれる。感動したことを書け、気持ちを書けというよりも、事実を書いていくことで説得力を持ち、心情が伝わってくることもあるのである。「ひろさき」第 21 号 P228 (傍線部 小山内)

これらは生活詩と呼ばれ、表現としては写生が多くを占めているが、作品 B は弟と先生を「発見」して写生した。見過ごしてしまいそうな場面をうまく捉えて観察表現している。

また、氏は、「事実を感情をまじえないで自分の持っている言葉で書く」ことの大切さも唱えている。次に掲げる詩は、両作品共この観点がほぼ活かされている作品である。

雨  
桔梗野 二年  
えのもと ゆか  
雨が  
パラパラふってきた。  
一年生が  
かみをてで  
くしゃくしゃにして  
エメロンシャンプーで  
歌っていた。  
C

秋の空  
船沢 六年  
対馬 正光  
校庭で体操をしながら、  
からだを、  
ぐっと後ろにそらせると、  
秋の空が真青<sup>ママ</sup>だった。  
からだを、  
ぎゅっと前に曲げると、  
古ぼけた校舎が、  
さかさまに見えた。  
この運動を  
繰り返しているうちに、  
小学校の校庭で見る  
最後の秋の空のように  
思われてさびしくなった。  
D

C 「ひろさき」第 19 号 P27

D 「ひろさき」第 18 号 P165

C の詩は、「あめがふってきた→事実」と「1 年生が歌っていた→事実」という 2 つの事実を記している表記になっているが、当時エメロンシャンプーの CM が入っていたこと、それを即興的に雨の中で楽しげに模擬している 1 年生を見つめる 2 年生の優しい眼差しが写し出されている。D の詩は、最後の 1 行に作者の寂しさが直喩的に表れているものの、そこまでの表現は「体操をして体をそらせると秋の空が真青→事実」「体を前に曲げると校舎が逆様→事実」というように 2 つの事実が連なっている。ここまでは作者の寂しさ

を感じ取ることはできないが、作品末の「小学校の校庭で見る最後の秋の空」という句から、作者の感情がセンチメンタリズム的なものに繋がっていることを知ることになる。

また氏は、「ひろさき」第15号に次のような総評を載せている。

集まった作品群を、素材別にわけてみると、だいたい次のようになっています。

低学年 ―― 先生。友だち。

中学年 ―― 友だち。父母。

高学年 ―― 自分。あるいは自分をとりまく世界。

先生という素材は、どの学年にも出てくるけれども、低学年では、ただたんに先生の表現。それが中学年では、友だち、学校のなかでの先生ということになり、高学年になると、自分の内部を1度通しての先生と、屈折した表現にかわってきています。

このことは、書く素材を低中高にわけてみたことと同じく、発達段階によって、少しずつ社会性を持ってくるものの表れだと思っています。

「ひろさき」 第15号 P227

第15号で上記のような方向性が示されて詩教育が行われてきた結果、「ひろさき」30年後は、以下のような素材(題材)へと傾向が様変わりしている。【入選作を分類別に調査】

低学年 ―― 家族。学校。動物。

中学年 ―― 生活。動物。友だち。

高学年 ―― 自分。あるいは自分をとりまく世界。部活。生活。 「ひろさき」 第45号

高学年の傾向が比較的に変わっていないことに比べて、低・中学年は先生よりも家族や身近な生活からの詩作が増えて、子ども達の意識が変化していることが窺える。下に掲げる作品Eは、或る月曜日の一瞬の出来事をうまく捉えて写生した作品である。月曜日のフォルムが共通項としてある前提に立って、「みんなはせすじをのぼしてすわった」という作者の発見がしなやかに作品を支えている。作品頭書の倦怠感が、先生の何気ない一言で拭い去られた驚きと発見を、写生という表現で余すことなく語っている。このような発見的認識は、氏がこの期に大切にしていた詩教育であった。心の内側を表し末尾の展開まで作者の知性が働いている。行動描写が学級の児童の内面描写に有機的に働いている。題名も「月曜日」ではなく「あくび」としてあり、層が揺れていない。感動の事実ではなく、感動のもとになることを書いて成功している詩である。取材も表現も中学年ならではのおもしろさがあり、泉谷明のめざした詩の世界が具現されていると考えられる。

「ひろさき」 第二十一号 P 83	先生は、 またじゅぎょうを始めた。 E	みんなはせすじをのぼしてすわった。 そうすると、 「月曜日は、いつもこうだからなあ。」 といった。	だれかが、あくびをした。 すると先生は、 「月曜日は、いつもこうだからなあ。」 と。	あくび 朝陽 四年 岩谷 真樹
-------------------------	---------------------------	--	---	-----------------------

### 2—3 片岡 通夫(⑧第23号～25号)の実際

現在も児童生徒の詩作活動を支援している息の長い実践家である片岡通夫は、日本作文の会が児童詩教育の発展を念じて優れた児童詩を指導した実践者に対して贈ると設定している「北原白秋賞」を1976年に受賞している。選者として務めていた時期に、評としては多くを語っていない。作品評は、作者である児童に共感した語りかけが多く「～でしたね」という内容面に比重が多くおかれていた。表現としては前選者と同様に「△説明が長くなっている→無駄な言葉がなかったかどうか再確認」を提案している。氏は、選外の児童にも細心の配慮を施し、書き続けることの大切さを常に説いている選者且つ指導者である。

人みなそれぞれ作品の見方・考え方は同じところもありますが、ちがうところもあります。それはそれでよいのではないかと考えています。

別の先生が審査したのであれば、ここにとりあげられなかった別の作品が選ばれていたかもしれません。各学年 15 編を選ぶのに、どれを入れたらよいかとても苦しみました。ちょっとのところで明暗が分かれたわけですから、入選した人は運がよかったともいえます。

そういうわけで、残念ながら選にもれた人もあまり悲しまないで、これからも詩の作品を書き続けるように努力してください。

「ひろさき」 第 23 号 P221

教育出版に採り上げられた F の詩は、口語体で書かれた作品と言える。詩の評は以下の通りである。「よくしもを手でさわったね。そうしたら、つめたかったんだね。はっぱがかおをだしていていないようにみえたんだね。よくみたね。」同 P222

泉谷明に比べ、作者への共感的な評が殆どを占めていたので、氏の『詩の教室』<sup>1)</sup>という実践記録集から詩教育についての姿勢や方向性を探ってみた。  
\*『詩の教室』は、1970 年～71 年に市立第二中学校で創造科として授業を行った実践記録集である。

しも  
文京 一年 赤石みどり  
せんせい  
しもだよ。  
まっしろだよ。  
手でさわったら  
とてもしゃつこかったよ。  
さわっていたら、  
はっぱが  
かおをだしたよ。  
ないてるかおだったよ。  
「ひろさき」 第二十三号 P 186 F

#### 1, 詩をつくるころ

詩とは、人間が生活の中で感じたり思ったりしたことを、直接的に集中的にリズムのあることばで表現するもの ― 心の叫び ―

2, 私の好きな詩 高村光太郎「牛」 黒田三郎「紙風船」「海」 石垣りん「冠」 (略)

#### 3, 詩を書くために

(1) よい詩を書くためには、生活に対する眼(認識)をもっていなくてはなりません。言い換えれば、生活を見つめる眼です。この眼があれば、今までは何でもなかったことが大きな問題となって、あるいは思考の対象となって浮かび上がってきます。そこに、光をあてた表現 ― 詩です。

(2) 感動を大切に ― 言語による再生 ― 説明的なことばをできるだけ省く ― ことばをつめる。

(3) 詩を書くたねがないとくどいている人へ そんなことはありません。みなさんは毎日生きています。そこには人間のふれあいがあります。怒りも悲しみも喜びも。

①くやしかったときの詩②かわいいと思ったとき③ねがい④批判や批評、非難・批難など

⑤かなしさ、むなしさ⑥おどろき⑦ねたみ⑧自責⑨友情⑩うそをついて後悔したこと⑪異性のこと……

(4) 強く心にひびいてこない詩はダメです ― 詩でない詩 ― ツマラナイ詩のこと (例詩 省略)

(5) 技法 A 比喩  $\begin{cases} \text{直喩} \\ \text{暗喩} \end{cases}$  B くり返し C 行分け (ABCそれぞれの例文 省略)

学校詩集『詩の教室』 P15

ここから分かるのは、一貫して「生活の中」を「見つめて」書くと言う主張である。上記のものは中学生対象に書かれたものなので題材の対象が小学生よりは広範囲になっているが「詩をつくるころ」は同じである。氏が選者を務めた期間の入選作を題材別に見ると、かなりの割合で「手伝い」が認められている。しかも農作業が圧倒的に多い。具体的には、林檎もぎや稲刈りである。生活の中での実感を大切にしていたことがここから明らかになった。また、出稼ぎに出る家族との別れや、父母の出稼ぎ中の苦しく寂しい生活を書いた作品も少なくない。実際に号が下ると出稼ぎそのものの数も減少傾向にあることからこのような作品を目にすることは減ったが、氏が選者を務めた期には数多く入選作とされていた。

次の 2 つの同題名の作品は、第 24 号と第 25 号に、5 年生の扉に選ばれた作品である。

<p>稲かり          附属 五年 小野 真嗣</p> <p>ザシュツ、ザシュツ、ザシュツ、          ぼくの体をゆすりながら、          きれいにかつていく稲かり機。</p> <p>ガサガサ、ザツ、ガサツ、ザツ、          ぼくのかつたあとの          稲を取っていく父。</p> <p>くり返し、          くり返し、          やつと一反かった。</p> <p>フウツ、          父とぼくは大きく息をついた。</p> <p>体じゅうがジガジガだ。</p> <p>土がいいにおいをだしてくれる。          ドサツドサツ、          においをかぎながら、          ぼうにわらをつんでいった。          手が          土とあせとで真っ黒になった。</p> <p>稲たばが、          ユラユラユラ、          強い風にふかれてゆれた。          さあ、二反目をかりはじめぞ。          「ひろさき」第二十四号 P 119 G</p>	<p>稲かり          東目屋 五年 佐藤 ゆうこ</p> <p>手ぬぐい、軍手。          決めては、おふるのシャツ。          まい上がるほこりで          のどは、いがいが。          せなかはちくちく。          顔から汗がしたたりおちる。          今年の稲は、ずしりと重い。          「よいしょ。」          かけ声かけて          トラクターまでかつぐ。          「こいだば、農家さ、          嫁にやってもいいな。」          と、父が、          ぼそつと言った。          はずかしかったけど、          その一言で          体のかゆさと          つかれが          スーとなくなった。          「ひろさき」第二十五号 H          P 119</p>
---	---

作品GもHも稲かりの実感が五感を通して作品化されている。また両方共行動描写に優れている。泉谷明選出の詩と趣を異にしているのが特徴である。

作品評はそれぞれ「土がいいにおいをだしてくれる→このことばは、百しょうの子どもだからこそ言えるすばらしいものです。作品G」「嫁にやってもいいなといわれるほど一生けんめいに働いたんだね。たのもしいな。作品H」というように作者に賞賛を与えている。

詩教育としての見地からはどのような提言があったのかというと、「ひろさき」第24号に以下のようなことが揚げられていた。(第25号の内容も大凡類似。)

- ① 詩は「心のさけび」です。すばらしいなあ、かなしいなあ、うれしいなあ……かんじたことを、ことばでまとめてみましょう。(中略)
- ③ 詩は長くてすぐれたものもありますが、だらだらしてかえってよくないのも目につきました。もっと強く感じたことを中心にして書き、いらないことばがないかどうか、よく考えてみましょう。
- ④ 各学年の「とびら」の作品は、主として弘前に関係の深い行事や、働くことをうたっていることなどをとりあげました。これは、郷里にほこりをもつことや、働くことに喜びをもつ、そんな子どもになってほしいと願うからです。(後略)

「ひろさき」第24号 P 229

前選者の泉谷明が「発見的認識」による「写生」を重要視していたのに対し、片岡通夫は「作者への共感」「生活再認識」という視点で選考を行っていたので、掲載されている入選作は薫りや雰囲気は違っている。これが選者の眼の違いでありこの期の文集の特徴と言える。

また、題材を詳細に分類して見ていくと、読書等学習後の感想を詩にしたものや、時の社会問題(戦争やいじめ等)を題材にした内容が作品化されていて、特筆に値すると考える。また、プライバシーということで家族の肖像が描かれなくなっている今日とは違い、家族間での離散等も作品化されている。表現というよりは題材化された内容から、生活をより深く見つめ、書くことで成長していく生活綴り方が底に流れているのを知ることができた。

更に、次の作品からは詩教育の一端として、草薙小学校においては戦後児童詩作品の代表作の1つである「ゆうやけ」が、教材として扱われていたことを知ることができた。

作品 I は、日本作文の会編の児童詩教育の本にも掲載されている詩である。『1 年生の児童詩教育』<sup>2)</sup>によると、鳥取の優れた児童詩の指導者、中原郁恵の指導したあまりにも有名な詩という紹介がなされている。この詩に感動した 2 年生が書いた作品に対する評は、「川にうつったきれいな夕やけを見たいんだね。よいしをよんで、心をうたれたので詩にしてみたんだね。」である。作者に共感しているが、表現に関しての評はない。

ゆうやけ  
鳥取 一年  
こにしよしえ  
ゆうやけでした。  
なをあらいました。  
うたをうたつて  
あらいました。  
川の中も  
ゆうやけでした。  
なをあらえば  
ゆうやけが  
がさがさめげるので  
わたしは  
そうつとあらいました。  
なをうごかさんやあに  
あらいました。  
I

思ったこと  
草薙 二年  
すとう たえこ  
ママ  
小西よしこさんの書いたしは  
やさしいと思う。  
こんなやさしい文が  
かいてある。  
なをあらえば、  
夕やけがめげるので  
わたしは  
ママ  
そろつとあらいました。  
よしこさんは  
やさしい心をもっている  
女の子だと思いました。  
わたしはどうだろう。  
もちろん夕やけは  
大すきだけれど  
川にうつったのを  
見たことがないから、  
一回でもいいから見てみたい。  
なっぱをあらわなくても  
いいから、  
川にうつったきれいな夕やけを  
じつと、  
いっぱい見てみたい。  
「ひろさき」第二十五号 J  
P 196

思ったことを素直に書いている作品だが、泉谷明が指摘するように△散文になってしまった感じが否めない(本研究前出 2—2 表 1 参照)。片岡通夫は誠実に働くことや素直な気持ちや作品化されることを第一義で認め、表現面に関しては評として多くを語らず、作者への共感を伝え続けた。内容面で認められていたものは学年を問わず以下の通りである。

【生活、家族、手伝い、学校、先生、友達、小動物、自然、社会問題や時事問題等】

前選者の泉谷明も指摘していた「学校」や「先生」についての作品は、温かいふれあいや遠慮なしの関係を物語っているものも多く、昨今見られなくなった傾向の作品である。「学校」や「先生」が題材として採り上げられなくなった背景に、どのような関わり合いの変化があったのかを推察することも学校教育全体のこととして考える必要があると感じた。

### 3 結果と考察

#### 3—1 泉谷 明と片岡 通夫の比較から

両選者共に、詩を書き続ける子の姿を願い、生き生きとした作品には賞賛を与えていた。しかし、詩教育において発見的認識を重要視し、そこから詩としての表現にまで示唆を与えた泉谷明と、生活再認識を詩の出発点とし、作者への共感というように、まず内容如何が選考の大部分を占めた片岡通夫の眼は大きく異なっていたことがこれまでの調査で明らかになった。ここから「ひろさき」の児童詩は、選者の眼によって認められた作品傾向が違っていたと言えることが言える。これは、時系列に添って変わっている教育的見解に基づくものではなく、選者のめざした詩教育観やめざす児童像の違いによるものと考えられる。

#### 【「ひろさき」児童詩の不易について】

<p>内 容</p> <p>○ 郷土弘前に関係の深いこと(もの) ○ 生活、家族、学校、先生、友達等 △ 強く心にひびいてこない詩はダメ →詩は心のさけび</p>	<p>表 現</p> <p>○ あたたかい ※ ○はポジティブ評価 ○ ～が生きている △はネガティブ評価 △ 説明が長く長文になつている →説明的なことばをできるだけ省く</p>
---	--

【「ひろさき」児童詩の流行について】（内容には詩教育観とめざす児童像を含む）		
泉谷明(⑦第14号～22号)の実際より		片岡通夫(⑧第23号～25号)の実際より
内 容	発見的認識 — 常に驚きにつながる発見	作者への共感 $\Delta$ 郷里にほこりをもつ(子) 生活再認識 $\Delta$ 働くことに喜びをもつ(子)
表 現	写生→事実を書いていくことで説得力を持ち、 心情が伝わってくることもあるのである 自分が持っていることばだけで表現	強く感じたことを中心に →いらないことばがないかどうか よく考えてみる

2 人の選者の実際から、不易と流行をこのように纏めることができた。この結果が、次の文集にどのように引き継がれていったかという点、次の選者に認められ選出される詩の傾向は、「作者と生活」か「認識と表現」に主眼が置かれるというような2つの観点で選考されていた。不易の部分に関しては、「郷土弘前に関係の深いこと」「強く心にひびいてくるもの」という点で一貫性のある選考がなされていた。これは、創刊当初に願った「弘前市の児童の生きた歴史を記していきたい」ということが長い間引き継がれ守られてきたと考えられる。今までも、そしてこれから、不易の部分はこの方向性を辿っていくと考える。

### 3—2 題材の発達傾向から見た不易性～『児童詩教育入門』から～

江口季好の『児童詩教育入門』<sup>3)</sup>には指導系統案がある。氏は数多くの児童詩を調査し、帰納的にその結果を発達段階に照らし合わせて纏めた。ここでは児童詩分析と傾向を示している。(以下は学年ごとの目標。指導内容も学年毎に掲げられているが、ここでは省略。)

1 年生	詩的表現のよさが感じられるようにし、 <u>詩に関心をもたせ、詩を書く意欲をもたせる。</u>
2 年生	詩と作文とを意識して書き分けることができるように、形式や内容のちがいをややわからせ、 <u>感動が書けるようにする。</u>
3 年生	取材の内容をひろげ、詩の表現形式により、 <u>むだなことばを省いて書けるようにする。</u>
4 年生	詩でもっとも大切なことは、 <u>真実な気持ちと感動</u> であることをわからせ、率直に、かざらない言葉でしかも <u>感動を十分表せるようにことばを選び、リズムや構成にも気をつけて書けるようにする。</u>
5 年生	詩は感動の凝縮したことばであり、エネルギーの放射力をもつようなものであることを理解させ、 <u>ことばをみがいて書く</u> ことができるようにする。
6 年生	現実の本質を見つめた、価値のある詩を書くことができるようにする。自分で <u>すすんで詩を読み、詩を書き、生活を見つめ、正しく生きていく</u> ようにする。 (傍線部 小山内) 『児童詩教育入門』 P314～P319

ここでは、「先入観がないから見たとおりに書く、言葉が極端に足りないので精いっぱい自分が持っているものだけで表現する。低学年ほど面白い作品が多いということは、ここにあるような気がする」とした泉谷明の文言が1・2年生の部分に重なっていることが分かる。また「説明的なことばをできるだけ省く→ことばをつめる」「言語による再生」「人間が生活の中で感じたり思ったりしたことを、直接的に集中的にリズムのあることばで表現する」という片岡通夫の提言が、中学年3・4年の部分にかなり近いものであることが分かる。更により詩を書くためには、「生活に対する眼(認識)をもっていなくてはなりません。生活を見つめる眼があれば、今までは何でもなかったことが大きな問題となって、あるいは思考の対象となって浮かび上がってくる」「高学年になると、自分の内部を1度通しての

屈折した表現にかわってきている」「発達段階によって、少しずつ社会性を持ってきている」等という片岡通夫の詩教育への考えも、江口季好のものとはほぼ同類であることが分かった。

この結果から、「ひろさき」所収の児童詩は、選者の眼の違いによって選出される作品の傾向は違っていたが、子どもの選んだ題材は、自然な発達段階に添っていることが分かった。ここから、選者が変わって選出される作風が多少異なっていると感じられても、大枠の中において「ひろさき」の児童詩題材は一般的な発達傾向の範疇にあることが判明した。

### 3—3 泉谷明の作品評の現代性～『新しい詩教育の理論』から～

2 人の選者の眼から「ひろさき」の児童詩の断面を探り、不易と流行を考察してみたが、全く異なる見地から詩教育を考えた人がある。『新しい詩教育の理論』<sup>4)</sup>の著者足立悦男である。氏は、「詩を教えることから詩が教えること、詩で教えることへ」と唱えている。

見方の詩教育では、作者または話者のものの見方と表現の仕方とを一体化させて考えようとする。これまでの詩教育でも表現の方法は、詩を教えるときの主要な着眼点であった。たとえば定型・非定型、行・連の構造、省略・比喩・倒置・リフレインなど、詩ジャンルに独自の表現方法は、詩を教えるさいの要点と見なされてきた。ただそれらのことが、半ば取り立て指導の形で、表現技術の問題として扱われる傾向のあったことは否めない。入試国語という外的な要請が、この傾向を強めていった事情もある。詩教育における技術主義とでも呼べるこの傾向は、情緒主義の傾向とともに、詩教育の中で克服されなければならない課題である。

技術主義の詩教育は、結果としての表現の方法にしか目をとめていない。表現の仕方が作者または話者の物事への見方と相関的な関係にある事実を見ようとしていない。詩教育の歴史において、表現の内容と方法を一体化させて教えていくことは、詩教育者の悲願であったといっている。内容から方法へ、方法から内容へと、さまざまな試みもなされてきた。その表現内容と表現方法の間に、詩的認識の観点を貫くことで、見方の詩教育もまたその一体化をねらうのである。『新しい詩教育の理論』 P 20～P 21

本研究は、「作者と生活」「認識と表現」という見地から作品や評の実際に迫ったが、このように見方の詩教育においては、「表現内容と表現方法の間に詩的認識の観点を貫く」という提案がなされている。この観点を使って「ひろさき」を研究考察するとまた違った傾向が発見できるだろう。泉谷明の作品評は足立氏の観点に限りなく近いところで書かれていることから評の現代性が推察できる。特に「ひろさき」40号代に入っては、叙情詩が多かった入選作が叙事詩的な作風の作品の増加に変わってきている。ここから、研究方法も再検討する必要があるのではと考える。児童詩は内容も表現も変化している。その変遷を解き明かし、選者は何を願ったかこれから書き進める詩はどうあればよいかを探っていきたい。

### 3—4 現代の「ひろさき」から

選者の眼の違いが、選出する作品の違いとなっていることはこれまで述べたが、作品Kのように片岡通夫にも認められ、泉谷明もきっと認めたであろう作品も実際には掲載されている。この作品は、郷土と生活と季節感が内言を通して作品化されている。江口季好の言うところの「率直に、かざらない言葉でしかも感動を十分表せるようにことばを選び、リズムや構成にも気をつけて書いて」い

る。このような詩が選者が変わってもよしとされている作品である。ここに「ひろさき」の児童詩の1つの典型を見ることができる。研究を重ねながら、後世に伝えていきたい。

雪ふるんた感じた  
東 四年  
吉岡 弦  
雪ふるんた感じた。  
頭にのしかかる雲。  
屋根の色は暗く、  
えのぐを  
ごちゃまぜにした色だ。  
あしたあたり  
岩木山に雪ふるのかなあ。  
ひろさき 第二十五号 K  
P 8 7

## 4 おわりに —今後の課題—

「ひろさき」第四十四号 P 7 L 3	それは直角。 かっこいい。 とってもはり切っていて 直角は急にとび出してくる。 ぼくが二本の線を引くと、 しずかに直角がかくれている。 世の中はふにやふにや。 直角が生まれていなかったら、 どんなへんな紙の中でも 教室の中は直角音だらけだ。 どこを見ても 直角だけがいくつもいくつも ぎょうぎよくならんでいる。 カチッ。 シャキーン。 パキッ。 ピキーン。 直角だらけ 北 三年 山本 雄介
---------------------------	--

今回採り上げた期より約 20 年後の作品には、作品 L のようなものも見られるようになってきた。この作品が掲載された時と、次の年に改めて採り上げられた時の作品評は以下の通りである。【叙情詩的な作風から離れて、叙事詩的なものに変化している実態に注目】

- ・ 直角という言葉のひびきと、一連の直角の音のひびきがぴったりあっています。ならんでいる、かくれている、とび出してくるなど、直角を教室にいる人のように考えたところがどくとくですばらしい。

金井 真由美 「ひろさき」第 44 号 P 287

- ・ この詩を作った雄介君は、素晴らしい宝を持っています。それは、聞こえない音が聞こえる素晴らしい耳と見えないものが見える素晴らしい目です。

冒頭から始まる擬音語。だれにも聞こえない音ですが、雄介君の耳にははっきりと聞こえているのですね。四つの音の表現は、雄介君の独特な感性が生み出した雄介君の心の中に響いてきた音なのですね。聞こえないわたしたちにも、文字を通していかにもそのように聞こえてくるようではありませんか。

わたしたちは、日常、身の周りの様子や風景を目にしています。しかし、多くの場合、目を通して飛び込んでくるものを映像として知覚しているにすぎないでしょう。雄介君も、もしかすると、普段は周りのものを何気なく見ている普通の子なのかもしれません。しかし、「直角」の勉強がきっかけとなって「直角」を意識して周りを見てみたのでしょう。そうしたら、今まで見えなかったものが見えてきたのです。何と何と、自分の周りは直角だらけではないか。この発見は、雄介君にとって新鮮な感動であり、驚きであり、喜びだったのです。感動は、そこから新たな想像の世界も生み出します。雄介君も「直角」のない世界に思いを巡らせています。

石戸谷 眞一 「ひろさき」第 45 号 巻頭言

郷土を大切にする文集であることに変わりはないが、現実問題としてよしとされる作品は変化してきている。これまで積み上げられてきた伝統を活かしながら、新しい「ひろさき」らしさを追求しつつ、詩教育の実践を継続していくことが大切であると考えている。

## ・引用文献

註 1 「小学校における地域文集の研究— 弘前市国語教育研究会編「ひろさき」を中心に—

弘前大学大学院教育学研究科修士課程 修士論文 小山内 早苗 2006 年 3 月

- 1) 片岡 通夫編 学校詩集『詩の教室』弘前市立第二中学校 三印写 1970 年 5 月
  - 2) 日本作文の会編『1~6 年生の児童詩教育』百合出版株式会社 1981 年 4 月第 1 版第 1 刷
  - 3) 江口 季好『児童詩教育入門』＜第 1 版＞百合出版株式会社 1968 年 8 月第 1 版第 1 刷
  - 4) 足立 悦男著『新しい詩教育の理論』明治図書出版株式会社 1983 年 8 月 初版刊
- ・ 弘前市国語教育研究会編 文集「ひろさき」創刊号から第 46 号 1961 年～2006 年

## ・参考文献

- ・ 日本作文の会 『児童詩教育事典』百合出版株式会社 1970 年 2 月 25 日 第 1 版第 1 刷